

ちよっと一服 講座

天皇杯に輝く名茶

そのぎ茶

～その歩みをたずねて～

東彼杵町史談会会員 谷山 満三郎

6. 名茶のふるさとを訪ねて

大村、東彼杵広域農道、平似田分岐点から町道平似田～太ノ浦線にうつり、北上すると遠目に到るふるさと林道の分岐点である。コスモス苑の大きな看板を右手に見ながら、さらに上ると大きな堤畔を通る、中池である、この堤をほぼ中心として右手に蕪堤。その下に三井木場堤、明暦元年(1665年)築工。

中池の左手に、千綿四池のうち最初に筑られた鹿の丸堤が紺碧の水面を満々と湛えている。

郷村記によると「金の丸」堤と記してあるが、寛文初年(1661年)に築工したこの堤の周辺に、数戸の農家を住ませ、鹿の丸村をつくったと記されている。

この堤の周りがある水田は圃場整備が立派にできており、今、春田耕しのトラクターが盛んに爆音をあげている。不思議なことに水田一枚残さず耕起されている。

茶園の畦間に稲ワラを施込んでいる、元気なおばあさんに声をかける。おばあさんの話では、茶園の畦間に敷くワラを採るので一枚残さず稲を作るのだそうだ。古くは、大野原の草を刈ったり、田の畦畔の草を刈って敷き込んだりしていたが、稲ワラが一番うまいお茶ができるとのことである。

一面、濃い緑色の茶園が広がり雑草一本も見えない手入れがよく行き届いた茶園である。

赤褐色山肌をとところどころに見え隠れさせている山裾の向こうに、ひと際高い尖頭を遠望する。多良岳(988m)経ヶ岳(1,076m)は約2千万年前から噴煙を揚げ、約2百万年前活動を止めた火山とのことである。数多の噴火で溶岩台地が形づくられ千綿台地、赤木台地、中尾台地などが形成されて、数千万年の営みの中で溶岩台地が風化し堆積して、或いは沃土に変わり、生命を宿して草木を育みながら、気の遠くなる程の大地変転を繰り返す



《日干茶をつくった平釜》

ながら現在に及んでいる。

赤褐色の大地は、「バランス」のよい成分を含み、常緑植物の生育を助け、生物生存の恩恵を人類に提供しているのである。

郷村記によると、上千綿、江串一帯には、今を遡ること3百余年（享保13年）すでに日干茶^{ひぼし}が生産されていて、商品化されている。大村藩では、江戸初期長崎開港に伴い、長崎街道の駄馬の需要が増えてきた。さらに江戸中期から開田が急速にすすむにつれ、水田の耕起が人と鋤から牛馬と鋤に替わり牛馬の需要が増え続けた。大村藩は、享保13年（1728年）馬奉行を設け、初代馬奉行に中尾作平を任じ、併せて弟、総平を馬医とした。中尾奉行は馬医術を修得して伝家の書冊を継がしめ、その子孫は、馬医として大村藩の馬政に携わったのであった。

大村藩は、牧場を多数設けたが、彼杵半島外海の沿岸、離島江島、平島、松島などに牧場を設け、さらに湾内の大崎半島や大野原などに大規模な牧場を経営したのである。

牧場では3年1周りとして、牧草^{そだ}を育て、飼料としたが、牧馬が回虫による発育不良が多く発生したので、馬の回虫下剤として日干茶を飲ませることが妙薬であることがわかり、日干茶の増産が図られた。

馬奉行の中尾氏系は上彼杵出身であり、このこともあってだろうか、上彼杵、上千綿地帯に日干茶の栽培がすすめられたのである。

藩の蔵入日干茶4,992斤の内、彼杵、千綿、江ノ串に割り付けられたのが2,600斤で全体の52%にも当り地帯の雇用を促し、特産品創出に大きく貢献したのである。このことから、江戸時代初期にすでに名茶「そのぎ茶」の生産地としての素地ができつつあったものと考えられる。

日干茶の製法は二通りある。

一、摘んだ新茶を大鍋で炒り、葉が萎^{しな}やかくなるまで棒などでかきませ縮む程度になった茶葉を大鍋から取り出し、よしずか竹製の干物に広げ熱を和げる、冷えた炒茶を呉座に広げて、天日に当て、カラカラになるまで干上げて、厚紙袋に入れて収納する。

大村藩で使用した日干茶の大部分は千綿の港から積出されて、外海沿岸の離島に届けられたのである。

注・「寄生虫のついている馬」については、日本農書60巻 P. 142に詳しい説明があるが、省略する。

以下次号

資料 水と緑と道、東彼杵町誌、九葉実録、郷村記千綿村、江串村、日本農書60巻など
註2 古書平家物語に、宇治川先人争いにスルスミ、イケツキ（池月）が登場するが、西海の名馬と見える。

【平成24年4月15日発行】